和歌俳句にある「雪」

石井庄司

朝、雨戸を繰って「雪！」といえば、こどもはすぐ庭にとび出して、犬と共にかけ歩く。そういうげんきなこどもを扱っておられる方々に、日本の古い和歌や俳句に見える「雪」の話をすることはむずかしい。編集の趣旨に合っているか、どうかわからないが、少しく思い出したことを書きつけてみる。

今を去ること千二百七十年のむかし、大和の飛鳥清御原の宮におられた天武天皇は、そこから程遠くないお里においでの藤原夫人に一首の歌を送られた。

わが里に大雪降れり大原の古りにし里に降らまくは後　　天武天皇

「わが里」とあるのは、天皇の居られる宮居をさし、今の飛鳥小学校のあたりといわれる清御原の宮のこと。そこに、今朝は大雪が降った。まことに美しいながめであるが、さて、そなたの居る大原の古びた里に降ることは、まだまだあとのことであろう。どうだ、このすばらしい雪景色は、さだめし羨しく思うことであろうというように、天皇は上機嫌で、やや軽く藤原夫人をからかうような、即興のざれた気分の作。一首の調子の上にもそれがよくあらわれている。また雪を珍しがった大和の宮廷の生活もうかがわれる。

これに対して、やがて藤原夫人からは左のような返歌がきた。

わが岡の龍神に言ひて降らしめし雪のくだけしそこに散りけむ　　藤原夫人

夫人の居られた大原は、今の飛鳥小学校の東、飛鳥神社の下を通っていくと約一キロぐらいのところの岡の村で飛鳥村小原の地。夫人は藤原鎌足の女で、五百重娘といい、新田部皇子の母、大原大刀自といわれた。夫人は、後宮に仕える職で、妃につぐものであった。

さて夫人の歌の意味は、都には大雪が降ったとて大よろこびの天皇に対して、実は、わたくしがこの岡にいる龍神にお祈りをして降らせた雪からそのまたほんのかけらがそちらの都に降ったのでございましょう。それを「大雪降れり」などというわけで、親愛の情こまやかな天皇のお気持にぴったりと合ったよい歌である。琴瑟相和すというのもこうであるかもしれない。くつろいで軽い気持のとき、いやに真面目くさって堅くなられたのではやりきれない。実によく呼吸のあった歌、それが雪を介して出ているところに、この雪の気持が出ているというべきか。

それから六、七十年も経って、奈良の東大寺の大仏もできた頃、聖武天皇の皇后、光明子に、左の一首がある。

わが背子と二人見ませばいくばくか此の降る雪のうれしからまし　光明皇后

「背子」とは、女性が男性を呼ぶことばで、ここでは聖武天皇をさす。わが背の君と二人で、ご一しょに見るのであったならば、どれほどかこの降る雪がうれしいことでありましょうということ。しかし、実際はそうではなくて、一人で眺めていることのつまらなさ、さびしさを訴えられたもので、雪というものが一入愛情をかきたてるものだと思われる。残念ながら万葉集には、天皇からの返歌は伝わっていない。

作者が不明であるが、おそらくは一般の女性の作と思われるものに

わが背子を今か今かと出で見れば沫雪降れり庭もほどろに

奈良時代には、男は妻のもとへ通った。そこで、この作者は、わが愛する背の君が、もうおいでになるか、もうおいでになるかと待ちきれないで外に出て見ると、いつの間に降ったのか、夜目にもはっきりと、庭には沫雪が積っていたという作。光明皇后の作のときとはちがって、言いきかすべき相手もなく、ひとりで自分と自分に口ずさんでいたものかもしれない。雪が積ってキリッと身に泌む心が人を思う情感とよく合っているようである。

沫雪のほどろほどろに降り敷けば平城の都しおもほゆるかも　大伴旅人

九州の大宰府にいた大伴旅人は、雪の降った日に、はるかに東の方の平城京を恋しがっている。暖かいと言われている九州にも雪が降る。その雪がまばらに降り敷いている景色を見ると、しきりに都のことが思い出されるという作。今も、東京を離れて遠くに行っている方は、雪の朝など、そういう感傷にうたれることもあろう。

旅人の子供の大伴家持は越中の国守として、今の富山県伏木の港のほとりに滞在した。天平勝宝三年には雪が四尺も積つたとある。

新しき年のはじめはいや年に雪踏みならし
常かくにもが　　大伴家持

家持は、正月二日国守の公館に宴を設けてこう歌っている。大雪は豊年の前兆ともいわれているので、めでたいことである。新年には、年ごとに降り積む雪を踏みならして、いつもこうして遊びたいものであるということ。家持は、その後、山陰の因幡の国守になって、そこでまた

新しき年のはじめの初春の今日降る雪のいやしけ吉事　　大伴家持

と、またしても、豊年のしるしとしての大雪をほめている。今日は、めでたいお正月であるが、ときしも、豊年のしるしといわれている雪が降る。この降る雪のいよ〳〵積み重なるように、ことしは吉事がいよ〳〵重ってくれという意味。家持のこの歌は、万葉集の一ばん終りにあって、家持はその後も二十四、五年生きながらえたはずのところ以後の歌は一首も伝わっていない。

さて話はもとへもどって、家持がまだ越中の国守であった頃、宴席で久米広縄という人が平城京での歌を伝え読んだことがある。もとの作者は三形沙弥という人。奈良時代の宴席では、自作でなく他人の作を伝誦することがあった。

大殿のこのもとほりの雪な踏みそね　しばしばも降らざる雪ぞ　山のみに降りし雪ぞ　ゆめ寄るな人や　な踏みそ雪や　　反歌

ありつつも見し給はむぞ大殿のこのもとほりの雪な踏みそね

雪の珍しい平城京のことである。たまたま大雪が降った。そこで、この大殿のめぐりの雪を踏むなよ。度々は降らない雪であるぞよ、山にだけ降って里には降らなかった雪であるぞよ。決して雪に近寄るな、人々よ、踏むなよ、雪はと、さながら人のことばをそのまゝ書きつけたように、長短の句を重ねて、動的な感じを与える。今でいう童謡に近い調べである。もちろん大人の作であるが童心の豊かな作である。この歌の作者が面目をほうふつさせる。

反歌は、このまゝにして、この大殿のあるじがごらんになるであろうよ。この大殿のまわりの雪を踏み消すなよというほゝえましい情景、万葉集の数ある作品のうちでも、特徴のある作である。

梅が枝に鳴きてうつろふ鶯の羽白たへに沫雪ぞ降る

梅が咲き鶯が鳴くようになってから、思いがけず春雪が降るということもある。それを詠んだもの、作者はわからないが、一種花鳥画を見るような歌で、万葉集の歌の時代的推移を思わせる。

次に平安時代の古今集を開くと次のような作がある。

冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ　清原深養父

「雪のふりけるをよみける」とあるので雪景色ということがわかる。雪を花にたとえて、冬でありながら空から花のように降ってくるのを見ると、雲の向うの天は、もう春になっているのであろうかと面白く述べたもの、ただ技巧だけが目立つ。さきにあげた万葉集は鶯が雪の中で鳴いていることをそのまゝ景色としてよむのとちがった見方である。

同じく雪の景色を見ては、月とみまちがうことをいう。

あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪　阪上是則

雪が一面に降り積っているのを、有明の月がさしているのかと見たというので、やはりたとえである。美しいことは美しいが、なにか造り物の美しさで、自然がない。

梅が枝に降りつむ雪は一年にふたたび咲ける花かとぞ見る　藤原公任

これも、さきの万葉の歌と似たような光景である。梅が咲いて春になったと思う頃、また寒さがもどってきて雪が白く積った、それを一年に二度花が咲いたのかと思ったというあいさつである。全くのあいさつである、座興にことばをもてあそんでいるので、真実性がとぼしくなっている。万葉集を純真なこどもの心とすれば、古今集や拾遺集は、大人の虚飾である。

小倉百人一首にもあって、皆よく知っておられる、赤人の富士山の雪の歌。

田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつゝ

これは新古今集にある形で、いわゆる新古今調という後世風になっているもの。万葉集のは

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける

前の方のは、いかにもよい調子になっている。しかし、実際の景色としては、はっきり眼に浮かんで来ない。そこは、万葉集ならば「真白にぞ」といい、「富士の高嶺に雪は降りける」とあって、詠歎している。これは、はっきりと富士の姿が眼の前に見えてくる。この二首を比べて、万葉集の歌風と、後世の新古今集風とのちがいがよくわかると思う。

和歌の世界は広く、まだいくらでもあるが、一応これくらいにして、俳句に移ろう。

蕉芭の作には雪が多い。

酒のめばいとど寐られぬ夜の雪　芭蕉

深川の芭蕉庵にあって、芭蕉はひとり庵にこもっていた。あまりいけぬ口ながら少しばかり酒を飲むと精神がたかぶって、いよ〳〵寐られない。そとには静かに夜の雪が積っているというのである。芭蕉の独居の生活を詠んだものであるが「いとど寐られぬ」というのはおもしろい。芭蕉といえばとかく枯木のような冷い人と思うかもしれないが、こうして激情的な世界もあるのである。また深川の庵へ友人がたずねてきたときには、

君火をたけよき物見せむ雪まろげ　芭蕉

とも詠んだ。さあ君は火をたきつけよ、私はよいものをお目にかけようといって、積る雪をまろげて見せたというのである。

初雪に兎の皮の髭つくれ　芭蕉

「山中に子供とあそびて」とある。雪の日に芭蕉は子供らとあそんでいて、雪をかためて兎をこしらえた、その兎のひげを作ってくれというので、無邪気なこどもと一体になってあそびに余念のない芭蕉の姿がよくわかる。このような童心もあってこそ芭蕉のさびも生きてくるというものだ。

初雪や水仙の葉のたわむまで　芭蕉

初雪が水仙の葉にたまって、あの柔い緑の葉に白く雪が積って、それがやゝたわんでいるという、いかにも細かいセンスの句である。

いざ行かむ雪見にころぶところまで　芭蕉

馬をさへながむる雪のあしたかな　同

つめたいものが降ってきたからとて、コタツにもぐり込むような芭蕉ではない。雪の中では、じっとしていられない。「いざ行かむ雪見にころぶところまで」というわけでころぶところまで行こう。そこに自由なのび〳〵した生活が出ている。雪の朝は何もかも珍しい。馬に見とれている。

長々と川一筋や雪の原　凡兆

下京や雪積む上の夜の雨　同

印象のはっきりした句、しかも叙法もしっかりしている。「雪積む上の夜の雨」とはじめにできて、あとをなんと付けようかと迷っていたときに、芭蕉から、「下京や」という五文字を置くことを教えられ、それでこの句は完成したのであろう。下京は、京都の市内の上京と下京のちがいは、東京の山の手と下町といったもの。「下京や」と大きくゆったりとすわり、そして、雪積む上の夜の雨と冷えびえした感じが出ている句である。

おう〳〵といへど敲くや雪の門　去来

雪の夜の静かな境地を、夜になって訪問客のあることを述べたも

ので、ハイハイと返事しても、まだ伝わらぬと見えて、雪の門をたたいている光景。芭蕉の作と比べてみると、また別の感じがでている。

わがものと思へば軽し笠の雪

ということはよく言われている。ときには、こういう句こそ、本当の俳句だと思っている人があるかもしれない。しかし、これは、今日の俳句とは縁の遠いもので、けっきょくは川柳か教訓である。其角の原作は、

我が雪と思へば軽し笠の上　　其角

であって、さすがにこれは詩である。しかも、このちがいは、ちょっと説明だけではわかりにくい。よく考えてみて下さい。

信州柏原の俳諧寺一茶には、土地柄か雪の句が多い。

これがまあ終の栖か雪五尺　　一茶

文化九年十二月二十四日、郷里の柏原に帰ってきたときの感慨。自分と自分をあきらめるこころがある。よくも歌ってくれたと思う。

雪の日や故郷人のぶあしらひ　　一茶

は、例の故郷の人をよくいわない一茶のひがみ。こういう暗い感じの作もあるがまた次のような作もある。

うまそうな雪がふうはり〳〵と　　一茶

うまそうな雪とは、まるでたべてしまいたいような美事な雪。それを「ふうはりふうはりと」と言ったところがまたおもしろい。

参考文献

万葉集はいろいろあるが、斉藤茂吉「万葉秀歌上・下」（岩波新書）

潁原退蔵編　芭蕉俳句集（岩波文庫）

荻原井泉水編　一茶俳句集（岩波文庫）

（教育大学教授）

（27頁より続く）

普通ガラス（厚2mm）	○
バイタガラス（厚2mm）	三六・○
セロファン	七六
障子紙	四・三―二・○

バイタガラスやセロファンの透過性の良いのは結晶性だからであります。近頃、ビニールも良いため温室の障子に使用しています。従って冬期家庭用の簡易日光浴室にビニールを利用するのは賢明です。普通の障子紙の代りにビニールを張ればよいのです。普通ガラスの日光浴室は効果の少いことを忘れてはなりません。紫外線は直日光に当てることが肝心なのです。

（註）$\frac{1}{10^8 cm} = \frac{1}{100,000,000 cm}$

（母子愛育会福祉部長・医博）